S.　Ashina

＜前回：エコロジーの神学３・環境と経済＞

（１）環境論と政治・経済

１．東方敬信『神の国と経済倫理――キリスト教の生活世界をめざして』教文館。
　山本栄一『問いかける聖書と経済』感性楽人大学出版会。
　Ｍ・Ｌ・スタックハウス『公共神学と経済』聖学院大学出版会。

２．宗教と経済に通底する欲望の問題（欲望の肥大化とコントロール）　→　環境危機
　自由を原理とする生命倫理（自由主義的倫理）に対する環境倫理の平等原理

３．環境危機と経済危機（新自由主義の破綻）は同一の危機の現れである。

（２）**John B. Cobb, Jr., Christianity, Economics, and Ecology**, in: Hessel/Ruether（2000）

４．新しいコンセンサスと現状

①状況（497/1,2）

・人間中心主義と二元論について悔い改めるべきである、というコンセンサス

・現実にはほとんど変化を生じていない。
　強固に守られた習慣の作用、社会全体と、短期的な自己中心性を共有している

５．キリスト教の問題性と課題

①キリスト教徒はなぜ破壊を伴う科学技術を支持するのか(499/6-501/1)

・科学技術は貧困を縮小する（必要なものを生産し雇用を創出する＝豊かにする）

・キリスト教徒の価値観と経済学者とのそれとの近接性（物質的な必要を満たすという目標の共有）

・人口増加・人口爆発（伝統的価値観における生命の神聖性、家族の重視）
　医学の進歩、人間の生命を救うことは、我々の遺産・魂に深く根ざしている

②自然世界の保持へのコミットメントをはっきりと表現すること(501/2-503/1)

・科学技術のあり方の転換

・個々の建物や都市全体を少ないエネルギーと資源によって建設すること

・資源の再利用・リサイクル

・食物などの農産物の持続可能な形式の発展、一年生穀物を多年生穀物に代える

・食生活習慣の変化による土地利用への影響
　土地の適した利用（食肉用動物のための牧草地、穀物生産→人間が直接消費する）

・古代キリスト教の徳の復興
　他者（地球に共に生きる生きた被造物すべて）の幸福のために自分を犠牲にする
　　→　消費者志向社会からの撤退
　　すでに富裕である者は収入や財産の増加を進んで際し控えること。
　　収入と富の再分配についての公共政策の支持。

６．政策レベルの問題とキリスト教

①税政策の転換(503/2-504/2)

②税と予算による人口増加への抑制効果（歳入歳出政策）(504/3,4)

７．キリスト教の転換と経済・エコロジーの新しい関係

①キリスト教共同体内での必要性(506/7-507/3)
　地球・大地が神の被造物であること、人間はその一部であること、神はそこにそれを通して見出されること、これらを強調すること
　→　神学の悔い改め：人間が大地の上にあるいはその外に立っているかのように考えることによって、大地の幸福をほとんど考慮せずに大地の搾取を許してきた思考と感情における、習慣的となっている人間中心主義的なパターンを転換すること社会的責任の感覚、社会分析の重要性の感覚の回復

８．グローバル化における経済と政治(508/7-510/1)

（３）宗教と経済、問いの所在

９．宗教と経済は、宗教思想にとって、いわば隠れた問いである。「欲望」という問題。

・近代キリスト教思想の前提→宗教の内面化・精神化＝私事化

聖と俗の二分法：宗教と経済を分離する暗黙の思考法
本来の宗教、キリスト教は、御利益宗教ではない。魂・心情の純粋さが宗教の真髄である。
・現実の宗教を批判的に分析する際に、この二分法には、限界がある。
↓
経済・富・欲望は、キリスト教にとって、常に隠れた争点として存在した。
この経済と宗教とのリンクにこそ、宗教の根本的問いがある。
聖書の富者批判、愛の共産制、修道制の成立と展開、宗教改革、土着化など
まず、ここに問題の核心が存在することを認めるところから出発するとどうなるか。
10．Sallie McFague, "God's Household: Christianity, Economics, and Planetary Living," in: Paul F. Knitter & Chandra Muzaffar（eds.）, Subverting Greed. Religious Perspectives on the Global Economy, Orbis Books, 2002.
Abstract
11．マクフェイグに対して
・エコロジカルな経済学の内実あるいは詳細は？
・エコロジカルな経済モデルを支える人間理解は、現代の自由主義対共同体主義という論争において共同体主義の立場に立つことになるのか？
・問題のグローバルな性格と多元的な取り組みという構図を描くことは可能か？　どこに多元的な諸立場がコミュニケーション可能になる地平を見出しうるのか？　（自然神学？）
・単一の聖書的経済学ではなく、諸経済学の共有する方向性？　バルト的？

＜聖書の宗教と経済との多様な関連性＞
１．聖書から特定の政治システムを一義的に導出できない。経済・富の問題も同様である。富者批判という基調と祝福としての富理解まで。
↓
キリスト教思想は富に対して、いかなる理論を構築できるか？
６．「聖書における富の問題に関して、まず確認すべき点は、聖書には富に対する統一見解など存在しないということである。旧約聖書においては、一方に、富を神からの祝福とする考えがあり――知恵文学には、不正な富の獲得は別にして、富自体を肯定的に捉える言葉が散見される――、他方、預言書や黙示文学では、貧富の格差や不正との関連における富あるいは富者への強烈の批判が見られる。新約聖書においても、旧約聖書の富者批判を受け継いだ議論（福音書、ヤコブ書、ヨハネ黙示録）から、富自体よりも富に固執する欲望へと批判の論点を移す議論（パウロ書簡、牧会書簡）まで、様々な見解が存在する。
見解の多様性を認めた上で、聖書全体に関しては次の点が指摘できる。(1)不正義や過剰な欲望と結びつく富は否定される。(2)富あるいは富者についての論評は、共同体（たとえば教会）が置かれた社会的文脈と相関的である。共同体が社会の経済的政治的な権力構造との関わりを深めるについて、富自体への否定的見解は後退する傾向が見られる。」（「富」『キリスト教平和学事典』教文館、2009 年）

13．宗教の神学２――ヒック

（1）宗教の神学
１．宗教的多元性（複数性）と宗教多元主義：古い問題と新しい問題
２．近代的問題状況：人間の営みとしての宗教とその多様性、その中におけるキリスト教
３．宗教的多元性と教派的多元性→エキュメニズム
４．現実：対立・相克（戦争）、民族・経済・政治の状況下での宗教
５．多様性を整理しキリスト教をそこに位置づける議論
・啓示論、救済論、歴史神学→土着化論
・宗教類型論から価値判断へ：排他主義、包括主義、多元主義

６．諸テーマ（問題群）：戦争と平和（戦争論・平和論）、宗教間対話（対話論）、寛容（宗教的寛容論・信教の自由・政教分離）

（２）ヒックと英語圏の宗教哲学

・*Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1963（1990）.

Introduction What Is the philosophy of Religion?
Chapter 1 The Judaic-Christian Concept of God
Chapter 2 Arguments for the Existence of God
Chapter 3 Arguments Against the Existence of God
Chapter 4 The Problem of Evil
Chapter 5 Revelation and Faith
Chapter 6 Evidentialism, Foundationalism, and Rational Belief
Chapter 7 Problems of Religious Language
Chapter 8 The Problem of Verification
Chapter 9 The Conflicting Truth Claims of Different Religions
Chapter10 Human Destiny: Immortality and Resurrection
Chapter11 Human Destiny: Karma and Reincarnation
For Further Reading

・*An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.

1 Introduction
1 A Religious interpretation of religion
2 Religion as a family-resemblance concept
3 Belief in the transcendent
4 Problems of terminology
5 Outline of the argument

Part One Phenomenological
2 The Soteriological Character of Post-Axial Religion
3 Salvation/Liberation as Human Transformation
4 The Cosmic Optimism of Post-Axial Religion

Part Two The Religious Ambiguity of the Universe
5 Ontological, Cosmological and Design Arguments
6 Morality, Religious Experience and Overall Probability
7 The Naturalistic Option

Part Three Epistemological
8 Natural Meaning and Experience
9 Ethical and Aesthetic Meaning and Experience
10 Religious Meaning and Experience
11 Religion and Reality
12 Contemporary Non-Realist Religion
13 The Rationality of Religious Belief

Part Four Religious Pluralism
14 The Pluralistic Hypothesis

15 The *Personae* of the Real
16 The *Impersonae* of the Real

Part Five　Criteriological
17 Soteriology and Ethics
18 The Ethical Criterion
19 Myth, Mystery and the Unanswered Questions
20 The Problem of Conflicting Truth-Claims

Epilogue: The Future

・*Disputed Questions in Theology and the Philosophy of Religion*, Macmillan, 1993.

（２）ヒック宗教哲学の基本構想

Ａ．宗教概念
宗教史・宗教現象→基軸時代・救済宗教：自己中心から実在中心への転換
ポスト・モダン（本質主義以降）の概念規定→ヴィトゲンシュタイン・家族的類似性

Ｂ．宗教批判：近代以降の思想状況における宗教論
自然主義への論駁、宗教経験の擁護→合理性概念の再検討、終末論、
宇宙的楽観主義、還元主義批判
神の存在論証と悪論・神義論
宗教言語論→宗教的実在論
Ｃ．宗教的多元性：宗教的状況の現代
多元性と実在→ the Real
キリスト教の再解釈→排他主義、包括主義批判

以上の三つの問題領域は相互に結びついて宗教哲学の基礎問題を構成する。

（３）宗教言語と宗教的実在論

ここでは、Ｂについてヒックの議論をまとめてみよう。
１．『人はいかにして神に出会うか――宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館
・The principle of critical trust
「首尾一貫しないこの認識論の現況は、イギリス経験論が発展していく伝統のなかでしだいに明らかにされてきた。この伝統に属する思想家たちの独創性と才能を十分に論じることができないとしても、まずはそれを簡潔に要約すべきであろう。」（102-103）
John Locke（1632-1704）（127）、George Berkeley（1685-1753）、David Hume（1711-76）
G.E.Moore　（1873-1958）：ムーアは「二十世紀前半のもっとも重要な哲学者の一人であるが、この点でヒュームを支持し、私たちは証明できない多くのことを知っていると主張した。」（106）
There exists at present a living human body, which is *my* body.
The earth has existed also for many years before my body was born.
「実のところ、真理を直視するという意味での「知る」という言葉の理念的（つまりプラトン的）な意味において、あるいは論理的に誤りを犯しえないような心の状態にあるとき、私たちはただ現在あるままの意識内容と、そして」「分析的真理、つまりトートロジーの真理を知るだけである。」（106）
「ロックとバークレーに準拠し、そのため二十世紀のコモン・センス学派ないし日常言語学派の哲学者たちに支持されるヒュームは、私たちがつねに拠りどころとして生きてい

る暗黙的な原理の定式化を可能にしてくれる。これは、とくに疑う理由のないかぎり、そこにあるように見えるものはそこに存在するものとして受け入れる、ということを指している」、「通常、私たちは自らの経験を信頼している。また、もし信頼しなければ、一日たりとも、いや一時間たりとも生きていくことはできないだろう。しかし、これは盲目的な信頼ではなく、いつでも修正できる批判的な信頼である。もしも急に目が覚め、それが書斎にいてパソコンで仕事をしている夢であったとわかったならば、そのときにはよく思い返してみて、夢で見た経験は思い違いであった――夢は思い違いをさせるものだという特別な意味のもので――と考えなおすだろう。」（107-108）

「私たちが生きていくうえで拠りどころとしている暗黙の原理は、批判的信頼ということになる。」（108）

「では、どうしてこの「批判的信頼」のを原理を、宗教体験も含めて、明かな認知体験一般に当てはめてはいけないのだろうか。」（109）

・Experiencing as interpreting / critical ralism

「世界についての意識的経験と意識される世界とのあいだの関係に関して、三つの主要な立場」の区別。

「一つは素朴実在論」「私たちの身に周りの世界はそのあるがままの姿であるように思えるとする、日常的な自然な想定」、「すべての実際的な目的のためにはこれで何の支障もない。というのも、進化するにつれ、私たち人間の感覚は」「絶えず調節されてきたからである。」（119）

「素朴実在論に真っ向から対立するのが「観念論」である。これは、知覚された世界は私たちの意識のなかにあるだけである――より正確には私の意識のなかにだけある――、なぜなら私が交互作用する他者は、私の知覚世界の一部であるからだ、と主張する立場である。」（120）

「三つ目の、中間に立つ立場は、批判的実在論である。その基本原理は近代哲学に最大の影響を及ぼしたイマニエル・カント」「にまでさかのぼる。カント以前にも類似の考えは多くあったが、その内容を体系的な方法で明らかにしたのはカントであった」、「つてつもなく複雑」「ところどころ多様な解釈を迎え入れている」、「しかしカントは、私たちを超える実在、私たちから独立して存在する実在というもの容認した。けれども、実在はそれ自体では意識されず、観察もされないと論じた。それは、ただ人間精神の生得的構造としてのみ、その実在からのインパクト（衝撃）を、現象界のかたちをとって、意識にもたらすことができる。そこで私たちは各自の認知的感官によって、また意識の諸形式と諸カテゴリーによって、私たちに現れるままのものとして世界を意識するのである。」（121）

「「批判的実在論」というのは、二十世紀のアメリカの哲学者によって生みだされた言葉であるが、これは世界が存在すると気づくことに心が創造的に寄与することを認める一方、その世界が私たちからは独立して存在するという実在論的な主張を表明する。その主張は十分に確証され、認知心理学や知識社会学において長く認められてきた。」（122）

「経験するとは解釈することであるというとき、私は「解釈する」という言葉を、聖書解釈でいうテキストの解釈」「の意味で使うのではなく、環境が私たちの感覚にもたらすインパクト（衝撃）をつねに私たちは解釈しているという意味で使う。また「意味」という言葉を」「私たちが目的にかなった行動や対応ができるように仕向ける事態の特質という意味で使う」、「ウィトゲンシュタイン」「の「何かを何かとして見る」と呼んだものによって」（122）、「私たちは「それを解釈しながら見ている」のである」、「「何かを何かとして見る」は、私たちが日常生活のなかでいつもするように、すべての感覚を一つに合わせて使うときの「何かを何かとして経験する」にまで、ただちに拡張することができる。」（123）

２．*An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.

11 Religion and Reality（pp.172-189）

religious realism

Religious experience, then, is structured by religious beliefs, and religious beliefs are implicit within religious experience.

And by analogy religious realism is the view that the objects of religious belief exist independently of what we take to be our human experience of them. For each religious tradition refers to something ... that stands transcendingly above or undergirdingly beneath and giving meaning or value to our existence.（172）

Religious realism is not of course to be equated with a straightforwardly literal understanding of religious discourse.

We can therefore only experience the Real as its presence affects our distinctively human modes of consciousness, varying as these do in their apperceptive resources and habits from culture to culture and from individual to individual.（173）

↓

言語の指示機能として、宗教的実在論を論じるという構想。

３．宗教経験への信頼は批判的実在論として擁護できる（Ｂ）。

宗教経験について理論的な議論は無意味ではない。

＋

宗教史と現代の宗教的状況の事実としての宗教の複数性の問題（Ｃ）。

↓

この二つを理解可能にする宗教概念とはいかなるものか（宗教とは何か＝Ａ）。

４．こうした三つの問いを宗教哲学的に明確に論じた上で、キリスト教思想の内容の議論を展開する。

＜参考文献＞

１．宗教の神学

・古屋安雄『宗教の神学――その形成と課題』ヨルダン社、1985年。

・ヒック、ニッター編『キリスト教の絶対性を超えて――宗教的多元主義の神学』春秋社。

・G・デコスタ『キリスト教は宗教をどう考えるか――ポスト多元主義の宗教と神学』教文館。

２．John Hick

・*Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1963（1990）.（『宗教の哲学』勁草書房。）

・*An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.

・*Disputed Questions in Theology and the Philosophy of Religion*, Macmillan, 1993.

・*The New Frontier of Religion and Science. Religious Experience, Neuroscience and the Transcendent*, Palgrave Macmillan, 2006.（『人はいかにして神に出会うか　宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館。）

３．ジョン・ヒック『ジョン・ヒック自伝　宗教多元主義の実践と創造』トランスビュー、2006年。

４．間瀬啓允『現代の宗教哲学』勁草書房、1993年。

５．間瀬啓允・稲垣久和編『宗教多元主義の探究―ジョン・ヒック考―』大明堂、1995年。

６．間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社、2008年。